

0. はじめに

モンゴル語の目的節述部に現れる動詞の取る形式に -xAAr「するために」がある。これは形動詞接辞 -x に造格接辞 -AAr が接続した形と同形であるが、両形式の関係や違い等については十分に検討されてきていない。

本発表では Dixon (2009) による節連結の意味的分類に従って、モンゴル語の節連結に用いられる形式を整理する。その上で関連する諸形式と比較しつつ -xAAr が形動詞接辞 -x に造格接辞 -AAr が接続した形とは異なるものであると見た方が妥当であろうことを論じる。

1. 前提知識

モンゴル語は、モンゴル国や中国内モンゴル自治区といった地域に分布する言語であり、本発表で扱うのはこのうちモンゴル国で広く通用するハルハ・モンゴル語である。典型的には主要部後置型、接尾辞型の、いわゆるアルタイ型の言語である。提示する例はモンゴル国における新モンゴル文字正書法に従い、次のようにラテン文字転写したものを示す。(右がラテン文字) a:a, б:b, в:w, г:g, д:d, е:yö/ye, ё:yo, ж:ǰ, з:z, и:i, й:i, к:k, л:l, м:m, н:n, о:o, ө:ö, п:p, р:r, с:s, т:t, у:u, ү:ü, ф:f, х:x, ц:c, ч:č, ш:š, ь:', ы:y, ь:', э:e, ю:yu/yü, я:ya。なお、モンゴル語の各種接辞は語幹の母音や末尾の音に応じて異形態を取るが、代表形を示すのに異音の生じる部分に大文字を用いてこれを表現する。例えば本発表の標題にある -xAAr とは、実際に動詞語幹に接続した場合に実現形として -xaar, -xeer, -xoor, -xöör といった形式が現れることを意味する。

モンゴル語の動詞は、語幹に対し動詞接辞 1 つ接尾することで構成される。動詞接辞は主節の述部を成す定動詞接辞、名詞節や連体修飾節の述部を成す形動詞接辞、連用修飾節の述部を成す副動詞接辞に分類される。形動詞接辞には未来 -x、完了 -sAn、未完了 -AA、習慣 -dAg がある。

モンゴル語の節連結は副動詞接辞を付した動詞形式ばかりでなく、形動詞接辞を付した名詞節や連体修飾節に格接辞や後置詞を組み合わせるによっても表現される。主節の述語動詞は基本的に定動詞接辞 (やそのほかの主節専用の述語表現) を取り、これに先行する従属節が定動詞接辞以外を取るという形になる。従属節が取りうる形式について、詳細は次節を参照されたい。

その他、本発表に関連する事柄について列挙する。名詞に付される格接辞のうち造格 -AAr {-INS} とは、道具や手段を表す他、幅のある時間や通過する場所など様々な用法を有する。所属のカテゴリは名詞句 (格接辞の後ろ) や一部の副動詞接辞の後ろに付され、所有や所属といった関係を表すものである。このうち再帰所属 -AA {-REFL} は主語に関わるモノ・コトを表す名詞句に必須的に用いられるもので、人称所属のうち =n' {=3} (三人称所属) は主語に関わらないことを表す任意の要素である。形動詞接辞が付された動詞形は連体修飾節や名詞節にもなり、後ろに格接辞を付すことも可能である。

2. Dixon (2009) に従った節連結の形式の分類

本節では、モンゴル語における節連結の諸形式のうち特に従属節の動詞述語が取る形式を取り上げ、Dixon (2009) に基づいて分類する (次ページ表 1)。表に関する説明は表の下に付した。

表 1: モンゴル語の節連結における意味と形式の対応一覧

		形動詞 (+後置詞など)	副動詞	その他
時間	Is: 時間的連続		V-j, V-AAAd, V-n 「して」	
	Ir: 相対的時間	V-xAd 「するとき」 [V-FUT-DAT] V-x üye-d (同上) [V-FUT time-DAT] V-x бүр / болгон / тутам [V-FUT every] 「するたびに」 V-x хүртэл 「するまで」 [V-FUT until] V-x xoorond 「する間」 [V-FUT while] V-x zawsar / зуур 「する間」 [V-FUT besides] V-sn-ll daraa / xoino [V-PFV-GEN after] 「した後で」 V-sn-AAAs xoiš(同上) [V-PFV-ABL after] V-x-lln ömnö 「する前に」 [V-FUT-GEN before] V-x-tai zereg 「すると同時に」 [V-FUT-COM degree]	V-ngAA 「しながら」 V-ngUUt, V-mAgc, V-xIAAr 「するやいなや」 V-sAAr 「しつつ」	<u>-AAr 「するときに」</u> [-INS]
	Ic: 条件		V-WAI 「すれば」	bol 「ならば」
	IIc: 原因 「したので」	V-sn-ll tuld / tölöö [V-PFV-GEN purpose] V-sn-AAr [V-PFV-INS]	V-j, V-AAAd, V-n 「して」	učir(-aas) [reason(-ABL)] tul bol-ox-oor [to.become-FUT-INS] -AAAs bol-j [-ABL to.become-SIM]
	IIr: 結果 「した結果」			
帰結	IIp: 目的 「するために」	V-x-lln tuld / tölöö [V-FUT-GEN purpose]		<u>V-xaar</u> V-g ge-j [V-IMP3 to.say-SIM] V-x ge-j / g-eed [V-FUT to.say-SIM/ANT]
	III: 潜在的帰結 「しないように」	V-x=güi-n tuld / tölöö [V-FUT=NEG-GEN purpose]		
	追加	IVu: 順不同の追加		V-j, V-AAAd, V-n 「して」
IVs: 同じ出来事の追加				
IVe: 精緻化				
IVc: 対比			V-wč [V-CONC] V-j / V-AAAd bai-x-ad [V-SIM/ANT to.be-FUT-DAT]	ge-wč* [to.say-CONC] bol-owč [to.become-CONC]

≦: 代替	Vd: 離接			buyuu 「あるいは」
	Vr: 拒絶			-lln oron-d 「の代わりに」 [-GEN place-DAT] に」 <u>-AAr 「よりも」</u> [-INS]
	Vs: 提案			
≦: 様態	Vlr: 現実の様態			-AAr 「によって」 [-INS] yos-oor 「に従って」 [rule-INS] -lln daguu 「に従って」 [-GEN accordance] (yum)=šig/met(=I) [(thing)=like(=EMP)] 「ように」 -tAi adil 「と同じく」 [-COM same]
	Vlh: 仮説的様態			

表 1 は主に Kullmann & Tserenpil (1996: 282-318) を参考としつつ、後述の先行研究も参照しながら必要に応じ項目を加えて作成したものである。分析と和訳も発表者が付した。

表 1 の左列「形動詞(+後置詞)」は動詞の形動詞接辞を含む固定的な表現 (形動詞接辞を他の形動詞接辞に置き換えがたいもの)、中列「副動詞」は副動詞接辞を含む表現である。V は動詞接辞を表し、これに続く接辞は動詞接辞であることを示す。V を含まない接辞は名詞類 (形動詞接辞含む) に付される接辞である。- が付されていないものは独立性の高い要素であるが、表の右列「その他」に含まれるものは基本的に名詞類 (形動詞接辞) を直前に要求する。ただし **ge-wč*** は直前に特定の語類を要求しない。

表右「その他」に属するものは形動詞接辞に付されうる形式であるが、後置詞的でないもの (名詞類ではない、ないし名詞類由来ではないと考えられるもの) や、形動詞の種類を特定しないもの (どの形動詞形も直前に現れうるもの)、**ge-wč*** のほか、次節以降で扱う「llp 目的」-xAAr が含まれる。

3. 問題提起

本発表で考察の対象とするのは -xAAr という形式である。表 1 を見ると、「llp 目的」に -xAAr という形式がある他、「lr 相対的時間」、「Vs 提案」、「VI 様態」に含まれる造格接辞 -AAr は未来形動詞接辞 -x に後続すると -xAAr という形になり、見た目上これらは区別できない。以下の議論ではこれらが同形であることから分析上は -XAAR というグロスを振る。

モンゴル語に関する清格尔泰 (1991)、Kullmann & Tserenpil (1996)、Janhunen (2012) といった先行研究では、概して目的の意味を表すものを副動詞接辞という独立の接辞として扱い、形動詞接辞に造格接辞が後続したものは区別している。なお、伝統的モンゴル文字では綴りによって両者を区別しうるが、こうした伝統的モンゴル文字の綴りの問題については本発表での考察の対象としない。

-xAAr という形式の使用例を見ると、その多くが (1) に見るような「llp 目的」の用法である (例文と和訳の該当箇所を下線。以下同様)。

(1) *bi calingaa ur'dčilan awaxaar xöcöldöj baigaa.*

bi calin-AA ur'dčil-n aw-xAAr xöcöld-ĵ bai-AA
1SG salary-REFLto.advance-ASS to.get-XAAR to.endeavour-SIM to.be-IPFV

「私は給料を先取りできるように頑張っています」 インタビュー記事 (<https://gogo.mn/r/78kyv>)

他方、同形の -xAAR が確定条件の意味を表しているような (2) のような例も少なからず見られる。

(2) (速読の説明) *sain dasgal xii-AAAd ir-xAAR guraw/n üg-llg neg bolgo-j xar-dag.*

well training to.do-ANT to.come-XAAR three word-ACC one to.make-SIM to.see-HBT

「よく練習していくと3語が1語に見える(ようになる)。」インタビュー記事 (<https://gogo.mn/r/45591>)

直観的には (1)(2) のそれぞれの意味は全く別のように見えるので、それが先行研究において両者を別物として扱う根拠になっているものと思われる。Aikhenvald (2009) は Dixon (2009) に基づいて調査された諸言語について総括したもので、これによれば Ilp 目的 と確定条件を含む Ir 相対的時間 が同形式で表される言語の例はあるらしい(表2.「時間」列と「目的」行の交差部分)。しかし相対的時間に含まれる節間の意味関係は表1からも分かる通り多用であり、(1) のような目的の意味と (2) のような確定条件の意味が1つの形式に共存しうるかどうかは判然としない。

表2. 節連結標示の多機能性 (Aikhenvald 2009: 390, Table 1 に、本発表と関係する部分に着色したもの)

時間	見方：交差部分にxがある場合、列と行のそれぞれの節連結の意味を1つの形式で表すケースがいずれかの言語で見いだされたことを示す							
X	条件							
X	X	原因						
X		X	結果					
X		X	X	目的				
	X	X	X	X	潜在的帰結			
X	X	X	X			追加		
		X	X			X	対比	
	X				X	X	X	代替
X		X						様態

ここで、次のような問題提起をする。目的を表す用法とそれ以外の用法とでは、意味的な違いという理由以外に分かつ根拠があるのだろうか。この点を明らかにするために、次節ではまず 4.1. で形動詞接辞+造格接辞が表す意味について先行研究の記述から、意味の分布を検討する。4.2. では目的を表す用法とそれ以外とで形態的にも同形であるとは言い難いことを示す。4.3. で以上の議論をまとめる。

4. 分析・考察

4.1. 形動詞接辞+造格接辞の意味

形動詞接辞+造格接辞の形式が成す意味について、清格尔泰 (1991: 298-303) は 12 種に分類している。以下の (3) は清格尔泰 (1991) による分類の順番を並べ替えて整理し直し、発表者によるコメントを添えて示したものである。例は和訳のみ示し、該当箇所には下線を引く。

(3) 形動詞接辞+造格接辞の意味 (清格尔泰 1991: 298-303 を整理し直したもの。次ページに続く)

- ・造格の本来的な用法 a. 「～することによって」(例：殺すことで脅す) ...VI 様態
- ・原因と相対的時間 b. 「～したことによって」(例：よく頑張ったことで成功した) ...IIc 原因
- c. 時機関係 (例：彼が来たら聞いてみよう) ...Ir 相対的時間
- d. 並行関係 (例：座りながら眠る) ...Ir 相対的時間

※以下は本発表では紙幅の都合により基本的に扱わないため、簡略にまとめるのみに留める。

- ・「思う」と「なる」 e. 「手に入れようと思って」 f. 「言った通りになる」 g. 「行くことになる」
- ・その他 h. 目的関係 (例：医者になるために頑張る) ...llp 目的
- i. 選択関係 (例：立つよりも座れ) ...Vs 提案
- j. すべき動作 (例：私には言うべき言葉がない) ※名詞を修飾する例のみ
- k. 「走るのが早い」 l. その「嫌けど行くときは行く」など

<c. 時機関係>の意図するところについて清格尔泰 (1991: 299) は十分に説明していない。挙げられた例文から見るに「～すると」「～したら」「～するときに」といった「lr 相対的時間」に属するような意味を想定したものであり、(2) の用例もここに含まれるのではないかと考えられる。

清格尔泰 (1991) は b.につき完了形動詞 -sAn +造格接辞の例のみ、d.につき未完了形動詞 -AA +造格接辞の例のみを挙げている。これらは形動詞本来の意味 (完了、未完了) に由来するもので、実質はそれぞれ b. は a. の「VI 様態」であり、d. は c. の「lr 相対的時間」であろう。1つの形式が「V 様態」と「llc 原因」、「lr 相対的時間」の両機能を有することは表 2 (「様態」列と「原因」「時間」行) とも矛盾しない。

4.2. 形式上の違い

ここまで「llp 目的」の -xAAr と形動詞接辞+造格接辞は同形であると述べてきたが、厳密には次の点で同形であるとは言い難い。目的の -xAAr は①所属のカテゴリを表示することなく、②“x”と“AAr”を切り離すことができない一方、a (=「VI 様態」), c (=「lr 相対的時間」) の用法では①所属カテゴリを表示し得、②形動詞接辞 -x の部分を他の形動詞接辞に換えたり、=güi {=neg} を付したりすることが可能である。

①については -xAAr が確定条件の意味で用いられる (4),(5) の例を参照されたい。(4) では -xAAr の後ろに -AA が、(5) では =n' が付されているが、これは所属のカテゴリを表示するものである。所属のカテゴリについては 1. でも触れたが、とくに従属節に付されると主節との同主語・異主語を表す。表 1 の形動詞 (+後置詞) の多くと、副動詞 V-ngUUt, V-mAgc, V-xIAAr 「するやいなや」に付されうる。他方、目的の意味を表す (1) のような例で -xAAr に所属のカテゴリを表示することはできない。

(4) *bi udaxgüi gar utasny dugaar awaxaaraa tan' ruu myessyej bičij baina aa!*

bi udaxgüi gar utas-lln dugaar aw-xAAR-AA tan'=RUU myessyej bič-ĵ
 1SG soon hand phone-GEN number to.get-XAAR-REFL 2SG.HON=ALL message to.write-SIM
 bai-nA=AA 「私はまもなく電話番号を手に入れたらあなたにショートメッセージを書きますよ！」
 to.be-NPST=EMP L. Tüdeu "Tuuraitai zarlig, ödtei bičig"

(5) *tüügeer olimp sonsood mongol xün alt awaxaar n' xanaa nüdeed, uilaldaad böön bayar l bolloo.*

ter-AAr olimp sons-AAAd mongol xün alt aw-xAAR=n' xana-AA
 that-INS Olympic to.listen.to-ANT Mongolia person gold to.get-XAAR=3 wall-REFL
 nüd-AAAd uilald-AAAd böön bayar=l bol-IAA
 to.hit-ANT to.cry.each.other-ANT everyone happy=EMP to.become-PST

「それ (=ラジオ) でオリンピックを聞いて、モンゴル人が金 (メダル) を取ると壁を叩いて泣き合っ
 皆で喜んだんです」 インタビュー記事 (<https://gogo.mn/r/47m5k>)

②について、-xAAR の“x”を他の形動詞接辞 -sAn {-PFV} や -dAg {-HBT} に置き換えて目的節を成すことができないばかりか、否定目的「～しないために」を作ることができないという特徴が観察される(否定目的の意味を表す場合は、「III 潜在的帰結」の表現を用いる)。他方、4.1. で述べたように<b. 原因>や<d. 並行関係>は<a. 様態>、<c. 時機関係>における形動詞接辞を -x からその他に置き換えたものと見ることができる。また次の (6) は<a. 様態>あるいは<c. 時機関係>の否定形 (-x=güi-AAr {-FUT=NEG-INS} 「しないことによって／しないときに」) の例であると考えられる。

(6) *šinjlex uxaan tyexnologiin ololtyg ašigla-x=güi-AAr yamar č uls oron xögjix bolomjgüi.*

šinjlex+uxaan tyexnologi-lln ololt-llg ašigla-x=güi-AAr yamar=č uls oron
 science technology-GEN achievement-ACC to.use-FUT=NEG-INS what=ever nation country
 xögj-x bolomj=güi 「科学技術の成果を利用しなければ／せずには、どんな国も発展
 to.develop-FUT chance=NEG できません」 インタビュー記事 (<https://gogo.mn/r/46308>)

4.3. まとめ

以上 4.1. で見たように -xAAR という形式には多様な意味があるが、4.2. から目的を表す -xAAR と時機関係を表す -xAAR は区別すべき形式上の異なりがあることが分かった。そして時機関係の -xAAR は形動詞接辞に造格接辞が付されたものであると見うるが、目的の意味を表すものについて少なくとも共時的にはそのように分析しがたいことを示した。これは従来の記述を裏付けるものである。

5. おわりに

本発表では、モンゴル語の従属節の述語動詞が取る -xAAR という形式に 2 種類あり、目的の意味を成すものと相対的時間の意味を成すものと別個のものであることを示した。その出発点として Dixon (2009) による節連結の分類と Aikhenvald (2009) によるそれらの相互関係があったが、どのような「相対的時間」が他の節連結の意味と繋がるのかについてはなお不明である。今後より精緻な意味地図を描き出していくことで節連結の類型論研究を発展させていけるものと考えられる。

ところでモンゴル語の -xAAR を巡っては目的副動詞の古形 -rA や (3) で示した e.~l. の用法との関係も問題になる。この点の精査は今後の課題としたい。

記号一覧 (Leipzig Glossing Rules に記載されていないもののみ掲載)

ANT: anterior 先行 / ass: associative 連合 / CONC: concessive 譲歩 / DAT: dative-locative 与位格 / EMP: emphatic 強調 / HBT: habitual 習慣 / HON: honorific 尊敬 / NPST: non-past 非過去 / SIM: simultaneous 同時

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2009) Semantics and Grammar in Clause Linking. R. M. W. Dixon & Alexandra Y. Aikhenvald (ed.) *The Semantics of Clause Linking: A Cross-linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press. pp380-402.
- Dixon, R. M. W. (2009) The Semantics of Clause Linking in Typological Perspective. R. M. W. Dixon & Alexandra Y. Aikhenvald (ed.) *The Semantics of Clause Linking: A Cross-linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press. pp1-55.
- Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Kullmann, Rita & D. Tserenpil (1996) *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jenco Ltd.
- 清格尔泰 (1991) 『蒙古语语法』呼和浩特: 内蒙古人民出版社.